

# 106定中の惨状 明確な「方針」も提起できない「本部」



# 日刊労働千葉

79.12.2  
No. 全国版 40

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)  
鉄電二二五八一九(公衆電話三三三二七二〇七)

## 労働の南の伝統を 復活させよう！

全国の労働組合員のみならず。この間の、労働千葉破壊策動と「水本」以外は何もと組まなかった「本部」反動暴力集団(八嶽片肺執行部)は、二月二六日から二八日の三日間、仙台で第一〇六回定期中央委員会を開催し、この間の労働千葉破壊策動も含めた「闘い」の「総括」を行いました。この一〇六定中の中に、「本部」反動暴力集団の行き詰まりは破産が色濃く反映されています。

### 「千葉再建」の破産と「片肺執行部」

一〇六定中における「本部」反動集団の破産を示す第一は、この間「数億の組合費と三万人を超える「オルグ」を投入したにもかかわらず、その成果としては、結局、「全国大会に七名が参加した」ことと「千葉事務所開設」だけしか出せず、自らは「片肺執行部」を解消することもできないまま、当然にも三五万人体制攻撃や80春闘への明確な闘う方針も提起出来ない点であります。「闘う」「闘う」という言葉だけで、政府・当局の「79春闘処分凍結」「スト圧殺」に屈服している「労働」の姿はあまりにも明白だと言わなければなりません。

### 自分以外は全部ダメ！ 「排除の論理」をますますエスカレート

そればかりではありません。この間、わが労働千葉は「水本」と「千葉破壊」しか取り組まない労働「本部」が社会党、総評をはじめとする戦線の中で全く孤立状態にあることを指摘してきました。そして、七九年春の地方選やその後の総選挙の闘いの中で、労働「本部」が千葉県内の四人の社会党候補を「すいせん」しなかったり、労働〇B(元副委員長)惣田清一候補(社会党・東京九区)に対してあからさまに非協力的対応をとったことなどが、さらに「労働」の孤立を深めている実態などについても暴露、糾弾してきたところであります。

一〇六定中方針の「総選挙総括」の項で「本部」反動分子は、「社中公軸」路線を厳しく批判し、返す刀で日共を「ズブズブの議会主義」と切って捨て、労働としては「労働議員懇」との「運動と連帯の輪を強固に結び、政治闘争の発展を期す」としてあります。現下の政治情勢の中で「社公」も「社共」も自分以外は全部切り捨てています。しかし、「労働

議員懇」のメンバーの多くが「社中公軸」の積極的推進者であるという現実を見るならば、「目黒選挙」など闘う気の全くないいかげんで無責任な「情勢分析」と言わなければなりません。支離滅裂な「本部」反動暴力分子

闘う気が全くないと言う以前に、方針書の文面上でツジツマを合せるという能力すら喪失してしまい、その路線的破産は、一〇六定中委方針の中で露わなものとなっています。

「千葉再建」や「総選挙」だけに止まらず労働千葉の10・22、11・1の二波の闘いをアリバイ闘争と中傷した「本部」は、自らの「10・21国際反戦闘争」を、「総評はカンパニア集会だけ・・・」と批判しながら、自らが「日勤者がほとんどいない日曜日の昼休み29分職場集会」などという「アリバイ闘争」をもってしか闘えなかったという現実を規定されて、全く支離滅裂な総括をしているのははじめ、方針書全体がガタガタなのです。全国の労働組合員のみならず。

一〇六定中を経て、闘う労働千葉と当局の武装親衛隊「本部」の対比はますます鮮明になっています。激動の八〇年代を、三五万人体制攻撃をはね返し、右翼的労線統一の流れに抗して闘い抜いてゆ

くために、労働大改革、労働の真の戦闘性を復活させるために、今こそ決起しようではありませんか。

**労働執行部の片肺飛行が続く**  
労働(国鉄動力車労働、四万七千人)は二十八日、仙台市で開かれた中央委で、これまで組織内対立が原因で欠員になっていた四人の中執委員を選出、また同じく欠員の副委員長に小泉京市氏(交渉部長)の昇格を決めた。しかし補充された四中執はいずれも、労働執行部メンバーを送り出した。労働執行部は、現主流派の政策研究(労研)と反主流派の労働運動研究(労運研)の対立がある。今年八月初めの定期大会では、労働執行部が執行部を「カット」し、その後三月中旬にわたって、片肺飛行が繰り返された。今中央委でも両派の話し合いは続いたが、特に今春分組選立した千葉労働の復旧問題について、両派の話し合いがつかなかった。